NEO HUMANが語る 真の人間性とは？

ピーター・スコット-モーガン

（ロボット工学博士）

インタビュアー
大野和基
（国際ジャーナリスト）

難病ＡＬＳによって、運動神経細胞の機能を失いつつある自らをＡＩに接続する――ＳＦ小説のような試みを行っているロボット科学者ピーター・スコット-モーガン。ベストセラーの著書*Peter 2.0*（邦訳『NEO HUMAN ネオ・ヒューマン』）にその模様を描き、注目を集める彼は、過酷な運命に屈することなく、自らを「サイボーグ」と呼び、人類で初めて人間と機械の融合という冒険に乗り出している。

今回彼は、本誌のためだけに、eメールでのインタビューに答えてくれた。

――ご自身のサイボーグのイメージは、どのような小説、ドラマ、映画作品から影響を受けていますか？　著書には、『スタートレック』のほか、アシモフの『われはロボット』、そして『６００万ドルの男』などが登場しています。

ピーター・スコット-モーガン（以下ＰＳＭ）　私の若いころの科学教育はすべて、『ドクター・フー』（一九六三年からイギリスＢＢＣで放映されている世界最長のＳＦテレビドラマシリーズ）と『スタートレック』に源があります。成長するにつれ、これらの楽観的なＳＦが大好きになりました。これらを観てわかったことは、宇宙のいかなる難問も、聡明さと果敢さをもち合わせ、驚異的なハイテクノロジーにアクセスできれば、解決できるということです。その次に出合ったのが『スター・ウォーズ』で、私の科学哲学の教育はそこで完結しました！

生きながらサイボーグになるとは？

――現在のＱＯＬ（クオリティ・オブ・ライフ）は、手術前に予想していたものと比べ、どうですか？　これからＱＯＬは向上していくと思いますか？

ＰＳＭ　もちろん、今のＱＯＬは以前とは非常に違います。今はサイボーグに変身しつつある過程で、この生活は始まったばかりです。でもＡＩに接続される度合いが日増しに増えることについてすばらしいのは、私の能力がコンピュータのパワーと同じ速度で増すことです。これは考えてみるとすごいことです。コンピュータのパワーは二、三年ごとに倍になっています。これは速いようには思えませんが、たった二〇年で千倍の速さになっています。私の能力も今後二〇年すれば今の千倍になることを意味することにはっと気づきます。ですから、私のＱＯＬには、改善の可能性が大いにあるといえます。

――失ってから、人間の最も重要な機能と感じたのは、特にどの部分ですか。

ＰＳＭ　最も重要だと感じたのは明らかに呼吸です。呼吸機能がなければ、私はゆっくりと窒息死していました。しかし面白いことに、呼吸を続けるために自分の声を犠牲にすることはそれほどの精神的打撃ではありませんでした。最も辛いのは、顔を動かして感情を表す能力を失っていくことです。まだ少し笑うことはできますが、それもおそらく一年以内にできなくなるでしょう。そうなると感情を伝えるのに、一〇

写真提供＝ピーター・スコット-モーガン

『スターウォーズ』の銀河帝国軍兵士ストームトルーパーとピーター。

〇パーセント自分のアバター（デジタル環境における分身）に依存することになります。

――本人が希望する、しないにかかわらず、自分の意識の一部（または全部）が、例えばアバターやロボットとしてなんらかの形で後世に残る可能性があることについて、どのように思いますか？

ＰＳＭ　これは、これからわずか三〇年以内に、多くの人にとって大きな問題になると思います。二〇五〇年までには間違いなく、これはサイエンス・フィクションではなく、サイエンス・エシックス（科学倫理）の問題になるでしょう。最終的にどうするか、自分の意識を残すか残さないかは当の本人の決断に委ねなければならないことは一〇〇パーセント確信していますが、これに関する法律が、科学界の実状よりもはるかに遅れていることは十分承知しています。私は国際法が追い付くことに協力できれば、と思っています。でないと我々はひどくアンフェアな状態に陥る可能性があります。

――個人的な感情として、どこまでが自分なのかが曖昧になることに、どことなく不安がよぎるのですが、そのような不安を感じることはありますか？

ＰＳＭ　現時点で私はすべてのことを眼球の動きでコントロールしていますが、とにかく今は超スローです。しかしながら、すでに私は何か奇妙なことが脳に起きているのを感じています。最初の変化は、眼球を動かすことについて考えるのをやめたときです（注：彼は、眼球の動きで、複数のコンピュータを操作している）。私は自分が求めている一つの文字のことを考えるだけで、残りは眼球が自動的に進めてくれます。文字やコマンドキーがどこにあるのかも覚えていません。二つ目の変化はもっと奇妙です。熟睡して夢をみているときに、眼球を使って単語を綴っている場合がときどきあることに気づきました。しかもそれがまったくノーマルに感じられるのです。最終的には、すべてが拡張された自分の体であるように感じることは間違いありません。

――様々な人間拡張ツールを自分に施していくことと、「ありのままの自分」でいるという理想は矛盾するのではないか、と言う人もいますが、どう思いますか？

ＰＳＭ　そういうふうに言っている同じ人が、（人間拡張ツールである）眼鏡をこれからかけることがなければ、杖をつくこともなければ、あるいは靴を履くこともなければ、あるいはどんな天気であっても服を着ることも一切なければ、私はその考えを尊重しますが、そうでないかぎり、そのように主張することはいささか偽善的ではないでしょうか。実際には、我々を拡張するという想像力を持つことは、我々の種（species）の、すばらしい特別な才能だと思います。

この続きは本誌でどうぞ！